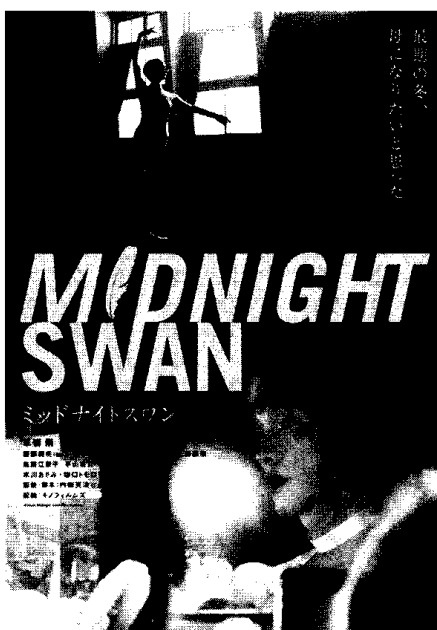


ミッドナイトスワン
(日本・2020)



S MAPの草薙剛が、身体的な性は男性であり性自認は女性であるトランスジェンダー役を見事に演じる。こんなにすごい俳優だったのか。風沙(草薙)は新宿のニューハーフショーklubで働いている。演し物に「白鳥の湖」を躍る。珍奇なものでもみるような客たちの視線に決して心は満たされない。加えて、毎週クリニックで女性ホルモンの筋肉注射を打つことは身

体的・経済的に大きな負担だった。

あるとき広島の実家の母親から電話がかかってくる。風沙のいとこのシングルマザーが養育を放棄した女子中学生を、しばらく預かってほしいというのだ。風沙は養育費も入ることから渋々受け入れる。一果(服部樹咲)というその子は暗い表情で一言も発しない。実は自分の前腕をかむという自傷行為をしていた。自分をうまく

出せず、転校先でからかいに来た男子生徒に椅子を投げつけてしまう。

そんな一果なので友だちができるはずもない。たまたま下校途中に女子生徒たちのバレエ教室の話を小耳に挟む。その教室をのぞきに行き、やがて生徒になる。一果にはバレエの経験があったのだ。しばらくすると、教室の先生は一果の才能に気づく。月謝が払えないという風沙に「育ててみたいんです」と訴える。

風沙にとつて一果が生きがいとなった。食事に気を配り、仕事を変えて男性としての働き口をみつける。不思議がる一果に「あなたのためよ」と言ったところ、一果は「頼んでないじゃろ」と激昂して、朝食をひっくり返す。このシーンはつらい。その後、母親が迎えにきて、一果は広島に戻る。一方、風沙は手術費

用の安いタイに飛んで性転換手術を受ける。心身ともに女性になった風沙は広島へ一果を迎えにく。しかし、母親たちと小競り合いになり、その最中に風沙の着衣がはだける。そこに膨らみかけている乳房がみえるのだ。母親と暮らす男は「この化けもの」と風沙を追い出す。

シーンは一果の卒業式に変わる。はじめて一果は笑顔をみせる。中学校を卒業したら東京に

出ることを母親と約束していた。しかも、アメリカのバレエ学校の奨学金も取れたのだった。一果は渡米前にかつて暮らした風沙のアパートを訪ねる。風沙は予後が悪く布団に横たわり、目が見えずおむつは血に染まっていた。風沙は一果に海が見たいとせがむ。翌日海岸で風沙はうわごとのように、子どもとき水泳の授業で自分は男子の海パンをはいていたが、スクール水着を着たかったという。そして、一果に踊ってほしいとねだる。当初はいやがっていた一果だが、意を決したように砂浜で「白鳥」を舞う。

ラストの舞台はアメリカ。一果が渡米して一年が経っていた。バレエコンクールの出番前に一果は「みてて」とつぶやいて演技へと向かう。一果役の服部は本物のトップバレリーナである。注射針を腕に垂直に刺す筋肉注射も正確に映し出されていて、迫力満点だ。

いい映画だけに憎まれ口もたたきたい。海辺で一果が踊り終わったあと海に入っていくシーンには既視感がある。たとえば『パーフェクト・レポリチュアション』のリリー・フランキーがそうだった。あつ、これもマイノリティをテーマにした映画でしたね!

(二〇二〇年九月三〇日・TOHOシネマズ府中)
(にししかわ・しんいち/明治大学教授)